

研究ノート

成人看護学実習直前の技術 チェックに対する学生からの評価 —実習終了後の質問紙調査から2年間の比較検討—



前川 直美、横井 和美、米田 照美、本田可奈子、大辻 裕子、内貴 千里、奥津 文子
滋賀県立大学 人間看護学部

背景 我が国の看護をめぐる環境は、急速な少子高齢化の進展、医療技術の進歩等大きく変化している。一方で、看護業務の複雑・多様化、国民の医療安全に関する意識の向上等の中で、学生の看護技術の実習の範囲や機会が限定される傾向にある。看護の臨地実習は、看護の方法について、「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させるために不可欠な過程であり、看護実践能力を育成し、臨地実習が重要な学びの場となるためには、実習指導者との連携は重要である。

目的 成人看護学実習直前の技術チェックに対して、実習終了後、看護学生に実施した調査をもとに、2年間の事前技術チェック項目の役立ち度について比較検討した。

方法 対象は、2007年度から2008年度に、A大学で成人看護学実習を履修した119名のうち、実習終了後の質問紙調査に協力の得られた看護学生86名であった。成人看護学実習直前の事前技術チェック項目の役立ち度などを調査内容とした。なお、回答は5段階評定とし、年度間ごとに χ^2 検定にて分析した。自由記載については全体の傾向をみた。

結果 「患者の状況に合わせたバイタルサイン」「事前知識をもった観察の仕方」「客観的情報の取り方」「ケアを実施するためのアセスメントの仕方」「報告の仕方」の項目すべて、2年間とも60～80%の学生が役立ったと評価していた。年度間の比較では、「報告の仕方」のみ2008年度が、より役立った傾向にあることが認められた ($p=0.023$)。

「事前技術チェックで最も役立った項目」として「事前知識をもった観察の仕方」が、統計学的な有意差は認められなかったが、2007年度は43%、2008年度は60%の学生が最も役立ったと評価している。一方、「ケアを実施するためのアセスメントの仕方」を回答した学生は、2007年度は4%、2008年度は3%であった。

結論 技術チェック項目のうち最も役立った項目は2年間とも「事前知識をもった観察の仕方」であった。与えられた課題について、自ら調べることを通して理論的知識を深め、臨地実習で活用できたといえる。一方、「ケアを行うためのアセスメントの仕方」を回答した学生は少なく、数々の経験を積み状況を的確にアセスメントできるような支援が必要である。さらに、担当指導者と事前にコミュニケーションを図ることは、実習をより具体的にイメージし、不安や緊張緩和につながる事が示唆された。

キーワード 看護学生、技術チェック、看護学実習、比較

I. 緒言

我が国の看護をめぐる環境は、急速な少子高齢化の進展、医療技術の進歩等大きく変化してきており、看護職員にはより患者の視点に立った質の高い看護の提供が求められている。一方で、看護業務の複雑・多様化、国民

の医療安全に関する意識の向上等の中で、学生の看護技術の実習の範囲や機会が限定される傾向にある¹⁾。

また、社団法人日本看護協会の調査によると、2003年度の新卒看護職員の入職後1年以内の離職率は全体平均で8.5%、ほぼ12人に一人が離職という結果であった。さらに職場定着を困難にしている要因として、「看護基礎教育終了時点の能力と看護現場で求める能力のギャップが大きい」との意見が76.2%であったと報告されている²⁾。

看護の臨地実習は、看護の方法について、「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させ

2009年9月30日受付、2010年1月9日受理

連絡先：前川 直美

滋賀県立大学人間看護学部

住 所：彦根市八坂町2500

e-mail: maekawa@nurse.usp.ac.jp

るために不可欠な過程³⁾である。さらに、対象が自らのもてる力を十分生かしながら生活していけるよう、学生が主体的に看護実践能力を働かせながら直接かかわり、その過程を通して看護とは何かを、実感をもって理解する授業である⁴⁾。看護実践能力を育成するにあたり、臨地実習が重要な学びの場となるためには、実習前からの取り組みが必要であり、特に実習指導者との連携は重要である。

A大学では、付属の臨地実習施設を有していないため、成人看護学実習の急性期は3施設、7つの病棟で実習を行い、慢性期は1つの施設、3つの病棟で実習を展開している。異なる施設や病棟を使用しながら個々の学生の実習目標を達成するには、綿密な調整と工夫が必要である。

このような現状を踏まえ、成人看護学領域では、2007年度から実習直前に担当指導者を交えての技術チェックとフリートークを試みている⁵⁾。2008年度は、学生の受け持ち患者により近い内容で学習できるように、課題設定の工夫と、技術チェック開催日を変更した。

この成人看護学実習直前の技術チェックに対して、実習終了後、看護学生に実施した調査をもとに、2年間の事前技術チェック項目の役立ち度について比較検討したので報告する。

II. 研究方法

1. 対象

2007年度から2008年度に、A大学で成人看護学実習を履修した119名のうち、実習終了後の質問紙調査に協力の得られた看護学生86名であった。

2. 方法

2007年度から成人看護学領域で実施している「担当指導者を交えての事前技術チェック」に対して、成人看護学実習終了後に質問紙調査を実施した。内容は、①事前技術チェックの何がどの程度実習に役立ちましたか ②事前技術チェックの何が一番、あなたの看護に役立ちましたか ③事前に技術チェックを受けて習得しておきたかった看護技術はありますかの3項目についてであった。2008年度の学生に対しては、④実習施設に行く前に、担当の実習指導の方と顔合わせやコミュニケーションをとることに対する意見や感想についての質問を追加した。分析は、5段階評価（よく役立った、時々役立った、どちらとも言えない、あまり役立たなかった、役立たなかった）については、各年度ごとに集計した。統計学的処理は、 χ^2 検定により行い、 $p < 0.05$ を有意差ありとした。自由記載については全体の傾向をみた。

3. 2007年度、2008年度の変更点

2007年度の学生の自由記述から、技術チェックで習得しておきたかった看護技術の中で清拭が挙げられたため、2008年度は、寝衣交換の項目に清拭を追加した。また、各実習病棟での患者像が反映されるように、設定患者の事前学習課題を一部変更し、2007年度は8課題、2008年度は10課題とした（表1）（表2）。

さらに受け持ち患者に実施する技術がより多く取り入れられるように、技術チェック開催日を変更した。2007年度は、実習が始まる前週の木曜日に技術チェックを行ったが、2008年度は、実習期間中の初日、受け持ち患者がほぼ確定している時期に実施した。

4. 倫理的配慮

研究の趣旨説明後、研究への自由意思による任意の参加、参加後の撤回の自由、匿名性の保持について、口頭と書面にて説明を行った。質問紙は、回収封筒への投函により同意の意思表示とみなした。なお、本研究は2007年度滋賀県立大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

III. 結果

成人看護学実習終了後の技術チェックに関する質問紙調査を実施した結果、86名の看護学生から協力を得た（回収率72.3%）。

1. 実習終了後、技術チェック内容の役立ち度

5段階評価のうち、「よく役立った」「時々役立った」を「役立ち群」、「どちらとも言えない」を「どちらでもない」、「あまり役立たなかった」「役立たなかった」を「非役立ち群」として、3群間の年度比較を行った。

「患者の状態に合わせたバイタル測定」(図1)では、2007年度「よく役立った」は22名(44%)、「時々役立った」は14名(28%)であり、「役立ち群」は72%であった。「どちらでもない」は、10名(20%)であり、「非役立ち群」は4名(8%)であった。2008年度「よく役立った」は13名(36%)、「時々役立った」は11名(30%)であり、「役立ち群」は66%であった。「どちらでもない」は11名(31%)、「非役立ち群」は1名(3%)であり、年度間の役立ち度に統計学的な有意差($p=0.364$)は認められなかった。

「事前知識をもった観察の仕方」(図2)では、2007年度「よく役立った」は31名(62%)で最も多く、「時々役立った」は11名(22%)であり、「役立ち群」は84%であった。「どちらでもない」は、7名(14%)であり、「非役立ち群」は1名(2%)であった。2008年度「よく役立った」は14名(39%)、「時々役立った」17名(47%)であり、「役立ち群」は86%、「どちらでもない」は3名(8%)であった。「非役立ち群」は2名(6%)であり、

年度間の役立ち度に有意差 (p=0.510) は認められなかった。

次に「客観的情報の取り方」(図3)では、2007年度「よく役立った」は20名(40%)、「時々役立った」14名(28%)であり、「役立ち群」は68%であった。「どちらでもない」は10名(20%)、「非役立ち群」は6名(12%)であった。2008年度「よく役立った」は8名(22%)、「時々役立った」20名(56%)であり、「役立ち群」は78%、「どちらでもない」は6名(17%)、「非役立ち群」は2名(4%)であり、年度間の有意差 (p=0.512) は認められなかった。

続いて「ケアを実施するためのアセスメントについて」(図4)では、2007年度「よく役立った」は12名(24%)、「時々役立った」23名(46%)であり、「役立ち群」は70%であった。「どちらでもない」は、8名(16%)、「非役

立ち群」は7名(14%)であった。2008年度「よく役立った」は5名(14%)と少なく、「時々役立った」16名(44%)であり「役立ち群」は、58%であった。「どちらでもない」は11名(31%)、「非役立ち群」4名(11%)であり、年度間の役立ち度に有意差 (p=0.275) は認められなかった。

最後に「報告の仕方」(図5)では、2007年度「よく役立った」は22名(44%)で最も多く、「時々役立った」は12名(24%)であり、「役立ち群」は68%であった。「どちらでもない」は、5名(10%)であり、「非役立ち群」は11名(22%)であった。2008年度「よく役立った」は9名(25%)、「時々役立った」は15名(42%)であり、「役立ち群」は67%、「どちらでもない」は、10名(28%)であった。「非役立ち群」は、2名(5%)であり、年度間の技術チェック内容の役立ち度に有意差 (p=0.023)

表1 技術チェックの事前学習課題の変更点(課題1)

課題1の目標: ケアを行うために必要なバイタル測定との関連の情報収集ができる	
2007年度	2008年度
<p>心臓リハビリテーションを受ける患者</p> <p>心臓リハビリテーション2日目、昨日初めてベッド周囲を歩行され心電図モニター波形やバイタルサインの著大な変化がなかったため、本日よりゆっくりと廊下歩行が開始される。心電図モニターを装着している。朝食を9時に済ました患者に対して「心臓リハビリテーションを実施する前の患者の状態を観てきて」と午前の10時の検温時に指示される。この患者に対しての状態観察と報告を行ってください。</p>	<p>心臓リハビリテーションを受ける患者</p> <p>2007年度と同じ内容</p>
<p>糖尿病の患者</p> <p>患者の状態:朝食前にインスリン注射を受け、朝食後、嘔吐した。午前10時頃「足の感覚が鈍くなっている。少し寒気がする」と患者が言っている。患者は自己血糖測定をしている。(ベッドサイドにガーグルベースと血糖測定器がある)</p>	<p>糖尿病の患者</p> <p>Bさんはインスリンを朝と夕食前に使用している。現在、自己血糖測定インスリン自己注射を指導されている。朝食前にインスリン注射を受け、朝食後、嘔吐した。午前10時頃「足の感覚が鈍くなっている。足を温めてほしい。少し寒気がする」と患者が言っている。患者の状態を観てきてどんな足浴をしたらいいのか報告してください。</p>
<p>化学療法を受ける患者</p> <p>1ヶ月前に初回化学療法(ジェムザール)を実施した。血液データが回復したので、ジェムザールの2クール目を昨日から開始している。現在、ソリタT3 500mlを輸液ポンプ使用にて20ml/hにて点滴中です。このあと抗がん剤(ジェムザール+生理食塩水100ml)を、輸液ポンプにて100ml/hで開始する予定である。患者は「前回よりしんどい」と言っている。抗がん剤投与前の患者の観察を行い、報告してください。(患者には抗がん剤であることを主治医より説明されている。カンファレンスで、患者からの質問にはごまかすことなく答えていくことを決めている)</p>	<p>化学療法を受ける患者</p> <p>Cさんは1ヶ月前に初回化学療法(抗がん剤はキロサイド)を受けた。血液検査データが回復したので、2クール目の化学療法(抗がん剤はキロサイド)を昨日から開始している。現在、ソリタT3 500mlのボトルが左前腕の血管から時間20mlで輸液ポンプにて持続点滴されています。状態観察の後、抗がん剤の輸液(生理食塩水100mlにキロサイドを溶かしたもの)が100ml/hで左前腕の同じ血管から開始される予定です。「前回よりしんどい」と患者は言っている。抗がん剤を投与前の状態の観察を行って報告してください。(患者には抗がん剤であることを主治医より説明されている)</p>
<p>2007年度、体位ドレナージを受ける患者の課題設定なし。</p>	<p>体位ドレナージを受ける患者</p> <p>Dさんは右中葉に陰影があり、咳が続いています。喀痰嚥下を容易にするため生食で超音波ネブライザーをした後、喀痰嚥下のための体位ドレナージを行っています。酸素吸入はネブライザー実施の1時間前に、血液ガス検査の結果が良かったので中止になっています。体位ドレナージをしてから30分程度経過するので状態を観察して報告してください。</p>

表2 技術チェックの事前学習課題の変更点(課題2, 3)

2007年度		2008年度	
課題2の目標: 一般的な全身麻酔からの回復過程を理解した観察ができる			
術後1日目 胃全摘出術	全身麻酔で胃全摘出術を受けた患者の手術後1日目の13時頃。酸素吸入は血液ガスの結果、早朝に終了したが、現在、痰が絡んでいる様子。マーグチューブは挿入中である。IVHによる持続輸液中でもある。輸液ポンプは使われていない、1日2000mlの輸液予定である。開放式と閉鎖式ドレーンが各1本ずつ入っている。バルーンカテーテルもまだ挿入中である。午後から起座・立位を進めるために、状態の観察を行って報告してください。	術後1日目 胃全摘出術	Aさんは全身麻酔と硬膜外麻酔で胃全摘出術を受けました。現在、術後1日目の午前10時頃です。持続硬膜外注入のカテーテルは挿入されたままです。酸素吸入は血液ガスの結果、早朝に終了したが、現在、痰が絡んでいる様子。マーグチューブは挿入中で、右鎖骨下静脈より持続輸液中でもあります。輸液ポンプは使われていない、1日2000mlの輸液予定で点滴を受けています。創部より開放式と閉鎖式のドレーンが各1本ずつ入っており、バルーンカテーテルもまだ挿入中です。また、弾性ストッキングによる血栓予防もなされています。午前6時に前日の排液・排尿チェックは済んでいます。午後から起座・立位を進めるために、状態の観察を行って報告してください。
	2007年度、上記の課題のみ	術後1日目 整形	Bさんは変形性膝関節症で右人工膝関節置換術を受けました。現在、術後1日目の午後10時頃です。麻酔は腰痛麻酔で、本日、朝から食事が開始され配膳されていますが、まだ、食事をされていません。酸素吸入は、朝6時に終了しています。左前腕より持続輸液中で1日1000mlの輸液予定で、輸液ポンプは使われていません。創部にはポルトパックによる排液ドレナージが行われ、弾性ストッキングによる血栓予防がなされています。また、バルーンカテーテル挿入中午前6時に前日の排液・排尿チェックが済んでいます。午前8時に鎮痛剤(ボルタレン座薬25mg or 持続硬膜外注入マーカイン1%)を使用したの、ギャッジアップを進めるため状態を観察して報告してください。
	2007年度、上記の課題のみ	術後1日目 婦人科	Cさんは全身麻酔で子宮広汎全摘出術を受けました。現在、術後1日目の午前10時頃です。酸素吸入は血液ガスの結果、早朝に終了しましたが、現在、痰が絡んでいる様子。左前腕より持続輸液中で1日2000mlの輸液予定で、輸液ポンプは使われていません。骨盤死腔内に開放式のドレーンが1本あり、腹腔内にガーゼタンポンが挿入してあります。バルーンカテーテル挿入中であり、弾性ストッキングによる血栓予防もなされています。午前6時に前日の排液・排尿チェックは済んでいます。術後の清拭を行うので、状態の観察を行って報告してください。
課題3の目標: 安全を確保したケアが提供できる			
車椅子移動	右人工膝関節の手術後4日目で関節可動域が痛みのため改善しないので、現在の関節可動域を計測してください。その後、右足免荷状態の患者をベッドから車椅子、車椅子からベッドへ移動させてください。	車椅子移動	Aさんは人工股関節置換術の手術後3日目です。今後、患者が1人で移動できるように、良肢位を保持し安全にベッドから車椅子移動を行ってください。
シーツ交換	ベッド上安静で自分では側臥位が困難な状態、左前腕より持続点滴し、心電図モニターを装着し、バルーンカテーテルを挿入している患者のシーツ交換をしてください。(指定の範囲で患者条件は学生が設定) 点滴60/h		2008年度、シーツ交換の課題設定なし
寝衣交換	ベッド上安静で自分では側臥位が困難な状態、左前腕より持続点滴し、心電図モニターを装着し、バルーンカテーテルを挿入している患者の寝衣交換をしてください。(指定の範囲で患者条件は学生が設定) 点滴60/h	寝衣交換 清拭	両側の下葉に胸水が貯留しているBさんは、経鼻カテーテルで1ℓ/分の酸素吸入を受けています。また、左前腕より持続点滴中で、心電図モニターを装着しています。発熱のため解熱剤を使用して、上半身に発汗が著名なので清拭して寝衣交換をしてください。
洗髪	肺がんの部分切除術4日目で離床が進み、右側にチェストドレーンによる胸腔ドレナージを行っている患者の洗髪をしてください。	洗髪	開腹手術を受けたCさんは、術後3日目で左前腕に持続点滴を受け病棟歩行しています。Cさんを洗髪台で洗髪してください。

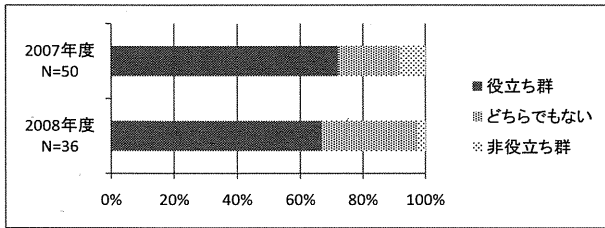


図1 患者の状況に合わせたバイタル測定の役立ち度の比較

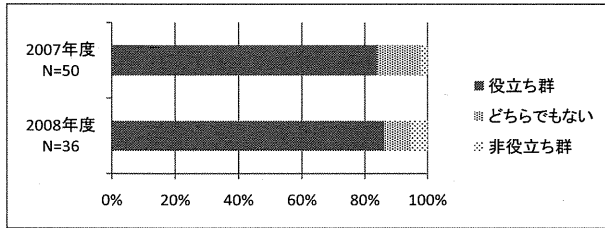


図2 事前知識をもった観察の仕方の役立ち度

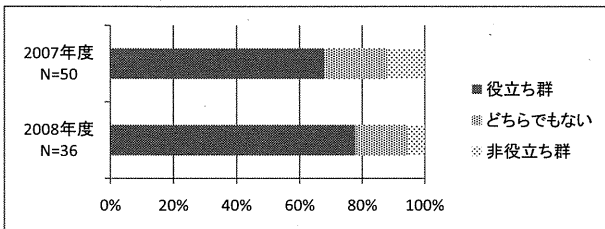


図3 客観的情報の取り方の役立ち度の比較

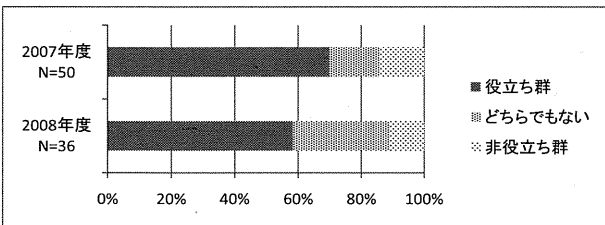


図4 ケアを実施するためのアセスメントの仕方の役立ち度の比較

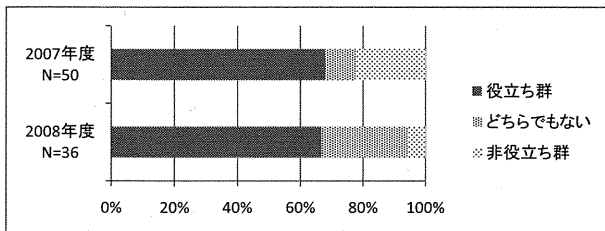


図5 報告の仕方の役立ち度の比較

が認められた。

2. 実習終了後、事前技術チェックで最も役立った項目

2007年度では、「事前知識をもった観察の仕方」が23名(43%)と最も多く、続いて「報告の仕方」10名(19%)、「客観的情報の取り方」7名(13%)、「患者の状況に合わせたバイタル測定」6名(11%)、最も少なかったのが、「ケアを実施するためのアセスメントの仕方」2名(4%)であった。

2008年度も、最も多かったのは「事前知識をもった観察の仕方」23名(60%)であった。「客観的情報の取り方」が次に多く6名(16%)、「患者の状況に合わせたバイタル測定」「報告の仕方」は、それぞれ4名ずつ(11%)であり、「ケアを実施するためのアセスメントの仕方」が1名(3%)と最も少なかった。(図6)

年度間の比較では、すべての項目において有意差は認められなかった。

3. 習得しておきたかった看護技術

輸液管理や術後疼痛のある患者への安楽なマッサージの方法、カテーテル挿入中の全身清拭、術後の清拭などのセルフケア援助、心電図の読み方、聴診(呼吸音、腸雑音など)の判断などであった。また、練習するための時間が欲しかったという回答もあった。

4. 実習直前に担当指導者との顔合わせやコミュニケーションを図ることについて

実際の病棟でどのような観察やケアが行われているのかを聞くことで、実習のイメージができて、初日の不安が少なかったという意見があった。また、他の実習ではないことだったので良かった、実習施設に行った時に知っている人がいることで緊張がほぐれたなどが挙げられた。

IV. 考察

成人看護学実習終了後、技術チェック内容の役立ち度としては、「患者の状況に合わせたバイタル測定」「事前知識をもった観察の仕方」「客観的情報の取り方」「ケアを実施するためのアセスメントの仕方」「報告の仕方」、2年間のいずれにおいても、60~80%以上の学生が役立たせていた。「役立ち群」「どちらでもない」「非役立ち群」の3群間の年度比較では、「報告の仕方」のみ統計学的な有意差(p=0.023)が認められた。

「報告の仕方」の2007年度の「役立ち群」は68%、「どちらでもない」は10%、「非役立ち群」は22%であり、2008年度は「役立ち群」67%、「どちらでもない」は28%、「非役立ち群」は5%であった。年度間に有意差が認められたが、成人看護学実習が全体のどの時期に行われたかとい

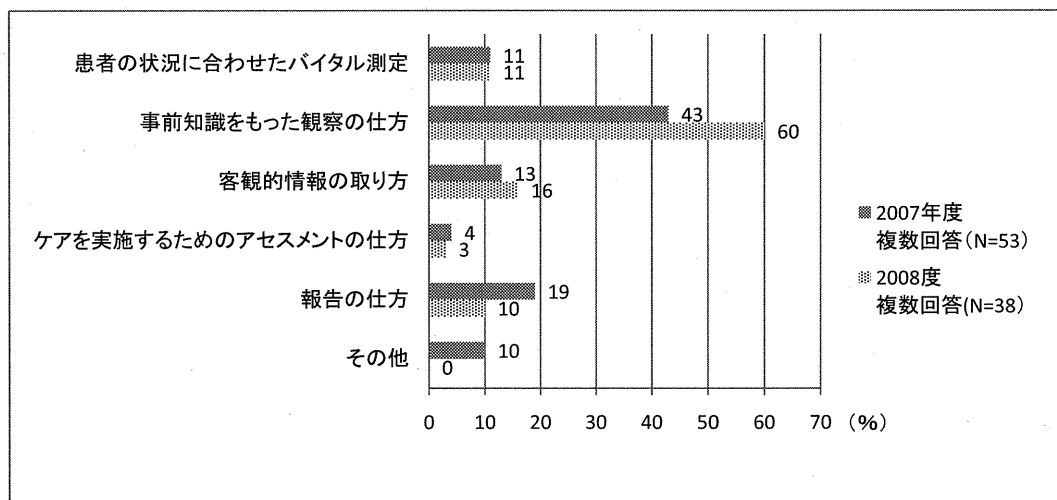


図6 技術チェックの中で最も看護に役立った項目

うことも影響があると思われる。後半に成人看護学実習を行った学生は、これまで他領域の実習でも報告する機会があり、それほど役立ったという認識は薄かったのではないかと推測される。

高谷ら⁹⁾は、臨床実習で状況を考えた報告や少なからず緊張を伴う状況で自分の考えを言えるようになるという力をつけることは、そのまま新人看護師になった時に実践力を伸ばす力になっていくと述べられている。だからこそ、学生が臨地実習時に報告の仕方を身につけていくことは必要不可欠であるといえる。

「事前技術チェックで最も役立った項目」として「事前知識をもった観察の仕方」が、統計学的な有意差は認められなかったが、2007年度は43%、2008年度は60%の学生が最も役立ったと評価している。2007年度の課題別平均学習時間は、術後観察が最も長く5.8±5.5時間であり、他の課題の学習時間よりも高いと報告されている⁷⁾。これは、2007年度課題2の術後観察に対しては、全員の課題であったことも影響し、多くの時間を費やしたと考えられる。さらに術後観察だけでなく、すべての疾患においても事前知識を持って観察することの必要性を、実習を通して実感できたからこそ、多くの学生に役立ったと考えられる。

一方、2008年度は課題項目数も増えたため、学生の実習に対する負担もあったと推測される。しかし60%の学生が、最も役立ったと評価していることから、課題内容が増えた分、自ら調べることなどにより理論的知識が深まったと思われる。この理論的知識をもとに、実習では観察を行うことができたため、最も役立った項目であったといえる。さらに2008年度は、技術チェック日を実習初日としたため、受け持ち患者がほぼ確定した状態

で技術チェックに臨むことができた。実習直前に、より受け持ち患者に近い内容で技術チェックを行うことで、知識を持って観察することの必要性を再認識し、実習に臨めたからこそ、最も役立った項目であったと考えられる。

2年間を通して「ケアを実施するためのアセスメントの仕方」が最も役立ったと回答した学生は少数であり、2007年度は4%、2008年度は3%であった。パトリシア・ベナーは、看護実践の技能を習得するプロセスとして、5段階を提示している(①初心者 ②新人 ③一人前 ④中堅 ⑤達人)。看護学生は、この段階の初心者にあたる。今までに経験したことがなくても、ガイドラインがあればそのとおりに行動することができる。しかし、その場で一体何を優先すべきかということまでは判断できず、状況に柔軟に対応することができない段階である⁹⁾。臨床現場では日々患者の状態が変化しており、学生が前日に立案した計画が、即実施につながるとは限らない。実習中は、患者の微妙な変化に気づくことができなったり、判断に迷うこともある。指導者や教員から優先すべきことは何なのかを指摘され、計画修正し、初めて実施に至る。

齊藤⁹⁾は、臨床指導者と教員のコミュニケーションがとれていて、指導方針が一致している場合は、学生は安心して実習に臨むことができると述べている。計画実施に至るまでのプロセスにおいても、指導者と教員、両者の指導方針を一致させておくことが、今後もさらに必要である。

実習中に様々な経験を積むということは、これまで看護を学んだ学生たちが実際の状況に遭遇し、そこで感じたり考える中でつかんでいくことである。状況を的確に

判断することは、数々の経験を積んだ結果できることであるため、今後もこれらの能力が向上できるような関わりが重要である。

看護技術に関して、常盤ら¹⁰⁾は、実習を振り返り、成人看護学の学内演習で取り上げる必要があると考える看護技術項目についての回答として、包帯交換、聴診技術、輸液、術後ベッド作成の要望が多かったと報告している。A大学の事前技術チェック時に取り上げてもらいたかった技術の中にも、聴診技術や、輸液管理等が含まれていた。また、練習するための時間が欲しかったという声もあり、学内の演習時間内では十分な技術の練習ができず、実習直前の技術チェックで再度復習したいという学生の思いが窺える。さらに術後の患者は、点滴や様々なカテーテルが挿入され、寝衣交換や清拭を行うに際にも、単に袖に点滴を通す行為だけでなく、刺入部や接続部の観察、逆流防止等、様々な技術が重なった行為となる。柴田ら¹¹⁾は、多くの技術が単独の行為ではなく、複数の技術が連続していること等を認識してきていると述べているように、学生は技術チェックにおいても、実施する機会の多い技術に関しては、再度学びを深めたかったと推測される。

最後に、実習直前に担当指導者と顔合わせやコミュニケーションを図ることについては、肯定的な意見が多かった。近年の同世代の若者同様、看護学生の基本的な生活能力や常識、学力が変化してきていると同時に、コミュニケーション能力が不足している傾向がある¹²⁾。大山ら¹³⁾は、学生は臨地実習において、学内演習で面識のある実習指導者が実習場にいたことで安心感を持って実習に臨めることにつながり、実習環境の充実につながると述べている。今回の事前に担当指導者と対面することは、不安や緊張緩和にもつながり、より臨地実習を円滑にできる試みであった。

V. 結 語

成人看護学実習直前に技術チェックを2年間試みたが、「患者の状況に合わせたバイタル測定」「事前知識をもった観察の仕方」「客観的情報の取り方」「ケアを実施するためのアセスメントの仕方」「報告の仕方」の5項目すべて、2年間とも60～80%以上の学生が役立たせていた。また、最も役立った項目は、2年間とも「事前知識をもった観察の仕方」であった。与えられた課題について、自ら調べることを通して理論的知識を深め、臨地実習で活用できたといえる。「ケアを行うためのアセスメントの仕方」は、最も少なかったため、数々の経験を積み、状況を的確にアセスメントできるような支援が必要である。さらに、担当指導者と事前にコミュニケーションを図ることは、実習をより具体的にイメージし、不安や緊張緩

和につながることを示唆された。

今後は、課題内容等も含め、実習指導者側からの意見も取り入れ、さらに実習の連携方法についても検討したい。

謝 辞

本研究の実施にあたりご協力いただいた実習指導者の皆様に感謝いたします。なお、本研究は、滋賀県立大学人間看護学部地域交流看護実践研究センターで推奨している、大学と病院との連携事業の一環としての共同研究である。

文 献

- 1) 厚生労働省医政局看護課：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書，2007.
- 2) 社団法人日本看護協会：2004年「新人看護職員の早期離職等実態調査」http://www.nurse.or.jp/home/opinion/press/2004pdf/press20050224_03.pdf
- 3) 文部科学省高等教育局医学教育課：大学における看護実践能力の充実に向けて，2002.
- 4) 戸田肇：大学と臨床（病院）との共同による実習指導の検討，看護学教育Ⅲ看護実践の能力の育成，12-21，日本看護協会出版会，2008.
- 5) 横井和美，竹村節子，沖野良枝他：病院・大学連携における実習指導に対する取り組み—実習指導者と連携した成人看護学実習直前の技術チェックに対する学生からの評価—，人間看護学研究，5，43-52，2009.
- 6) 高谷真由美，榎子嘉美，中島淑恵他：複数の体験を組み入れた成人看護実習が学生の实践能力に与える影響，順天堂大学医療看護学部医療看護学研究，5，102-107，2009.
- 7) 前掲書，5)
- 8) 谷口好美：パトリシア・ベナー，ケースを通してやさしく学ぶ看護理論改訂版，333-352，日総研，2006.
- 9) 齊藤茂子：新カリキュラムで臨地実習をどう見直すか，看護展望，34(2)，6-18，メヂカルフレンド社，2009.
- 10) 常盤文枝，藤田智恵子，高橋博美他：成人看護学実習における学生の看護技術体験，埼玉県立大学紀要，7，43-49，2005.
- 11) 柴田和恵，前田明子，小林千代他：成人看護学臨地実習における実習前の教育的介入の一考察—実習達成度自己評価と事前面接による学習支援に焦点をあ

てて，天使大学紀要， 8， 17-25， 2008.

12) 前掲書， 1)

13) 大山晶子， 矢島道子， 鈴木保弘他：学校と臨床の協

働による看護技術演習の実施，看護教育，47(10)，
876-883，2006.

(Summary)

**Evaluation from Student to Technical Check
Immediately before Practice of Adult Nursing Study
–Comparative Study of Two Years from Questionnaire
Investigation after Practice Ends–**

Naomi Maegawa, Kazumi Yokoi, Terumi Yoneda, Kanako Honda
Hiroko Otsuji, Chisato Naiki, Ayako Okutsu

School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

Key Words nursing students, technical check, nursing practice, comparative